



「今のままで大丈夫」。佐藤そのみさんは最近、大川小の前に立つと、妹がそう言ってくれていると感じる。宮城県石巻市、小玉重隆撮影



佐藤みずほさん

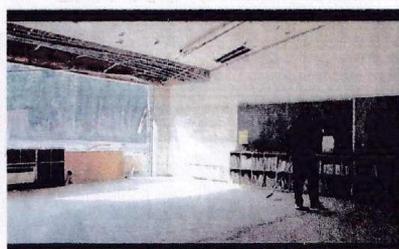


東日本大震災9年

かつて学んだ母校の跡で、佐藤そのみさん(23)はカメラをかまえた。日本大学芸術学部(東京)の4年生。卒業制作で撮る映画のテーマに選んだのは、宮城県石巻市の大川小学校だ。そこで、2歳年下で、6年生だった妹みずほさん(当時12)を失った。

11日朝、佐藤さんは、帰省中の実家で目覚めた。毎年緊張して迎える日。でも、いつもより落ち着いている自分に気づいた。午後には家族で大川小に行き、妹に声をかける。

「みずほへ、お元気ですかー」
カメラの前で、妹にあてた手紙



津波から生き残った男性が大川小を掃除している場面。自身のあり方に葛藤する姿が描かれる。佐藤そのみさん提供

大川小で あなたの瞳に 話せたら

妹を亡くした大学生 映画撮影

紙を自分が読むシーンから、映画は始まる。「みずほは、もう21の年だろうか。あつという間だね」
大川小で友人や妹を失った佐藤さんの幼なじみも手紙を読む。

県内の大学に進んだ男性は当時、大川小の5年生だった。校庭で津波にのまれたが奇跡的に助かり、その体験を各地で語ってきた。メディアに映る自分と現実の自分。「『まじめだね』って言われるけど、単に他人の目を気にして、それに合わせて生きているだけ」。男性は友人あての手紙で、そう明かす。

画面は切り替わり、関東のフオトスタジオ。家族連れに女性が笑顔で接している。仕事の後には行きつけのバーでグラスを傾ける。その映像に、亡くなった妹に語りかける女性の声が重なる。「今もついでにきてくれるんでしょ?」一緒にいるからこそ、つまらない人生なんて送らないよ。明るく、言い放つ。
残された者はどうあるべきか。佐藤さんは映画に、そんな問いを込めた。

児童74人と教職員10人が犠牲となった大川小は、津波被害の恐ろしさの象徴として注目され

残された人の思い「手紙」に込めた

てきた。遺族としての取材も相次ぎ、「あたかも立派な人かのように」に紹介された。遺族は悲しみを抱え、ずっと過去を背負って生きるもの。そんなステレオタイプな見方を押しつけられることへの反発や葛藤を、幼なじみの2人の姿にも重ねた。
佐藤さんは震災後、大川小と震災をテーマに映画を撮りたいと考えて、いまの大学に進んだ。しかし、遺族を傷つけることにならないか、不幸を利用してとらめられないかと、悩んだこともあった。「ここで逃げたら、絶対に後悔する」。何度も通い、今年2月、30分の映画を完成させた。

4月から都内の番組制作会社で働く。「自分が大川のことを伝えなければ」という使命感は、思えば重荷だったかも知れない。ただ、就職活動中、入社試験で番組の企画を考えたと、自分だったならこんなことを伝えたいかと想像を膨らませた。そして、そんな自分を、妹がそばで応援してくれているような気がした。

亡くなった人たちも、私たちが元気でいてくれればうれしいはず。批判も覚悟で、残された人に「亡くなった人の人生を、背負いすぎなくていいんだよ」と伝えたかった。
画面に映る佐藤さんは、妹に呼びかける。
「しばらく夢にも出てくれないもの。なんだか寂しいな。みんななど、先生たちとも仲良くいてね」

あの日の朝、洗面所で「おはよう」と言われたのに機械が悪くて無視をした。それが妹を見た最後だった。
「あなたの瞳に話せたら」。

映画のタイトルにした。「あなた」とは、失った人でもあり、大川小を見たことのない遠くの人たちでもある。いずれ、地元の人たちにも見てもらいたい。

映画の最後で、佐藤さんは妹へこう呼びかける。「みずほに恥ずかしくない姉でいられていいだろうかと、不安になります。でもみずほはそんなこと、ちっとも気にしてないのかもね。みずほはみずほで、そっちなで忙しいみたいだから」。手紙を閉じ、画面の外へ駆け出していく。
4月から、都内の制作会社で働く。新しい世界で、向き合うテーマを探していこうと思う。(山本逸生)